Heart Beauty Salon

サトリのココロ

多くの人が孤立感、生きにくさを感じる今、
仏教に興味を持つ人が増えています。
僧侶に聞く、弱い自分と向き合う方法――

日蓮宗本立寺住職
加藤慈然さん

第26回

竹取物語が教えることを今こそ伝えたいのです

かとう・じねん　1958年、広島県生まれ。1981年、早稲田大学第一文学部卒業後、立正大学仏教学部卒業。尾道市の妙宣寺の副住職を務めながら、1992年より竹原市の本立寺の住職に。1998年に本立寺境内に「かぐや姫美術館」をオープン。㈳尾道観光協会理事。かぐや姫美術館／広島県竹原市忠海床浦2-12-8 ☎0846-26-0982（入館・見学の場合は事前に要連絡）

本立寺は約700年前、現在の静岡県富士宮市に建っていました。その後、約110年前にこの竹原市に移築・再興。私は20年前からこの本立寺で住職を務めています。

町は少子高齢化で空き家なども増え、檀家さんもどんどん減っていました。昔は町にもお寺の境内にもあふれていた子どもが、今ではほとんどいない。本来は地域を支える核として成り立っていたお寺と、そんなお寺に期待して周辺に暮らし、信仰していた人たちとの関係性がなくなっている……。

「町の寂しい状況を何とかしたい」「もう1回、地域の核となるようにお寺を再生したい」……今あるものを生かして寺を再構築するために、物語性のある寺作りがしたいと思いました。そして、そこに町作りのヒントがありました。

地域住民の共感を得る竹取物語でお寺を元気に！

この竹原市のイメージキャラクターはかぐや姫。地域で愛されるお寺にしたいという思いから、かぐや姫をメインのキャラクターにして多くの方に足を運んでいただけるように、13年前、1年がかりで境内に「かぐや姫美術館」を作りました。1年間で延べ1000人のボランティアさんの力を借りて、当時荒れていたお寺を再生したというわけです。

美術館としてはちょっと薄暗いですが、竹取の翁が竹やぶの中に入ってきたかのような感じです。翁が竹やぶの中で光るもの（かぐや姫）を見つける……それは、いろいろな問題がある中でも一つの光を見つけることで人生が豊かになるという、現代にも通じるストーリー。そういう共感を持って、檀家さんや地域の人たちと一緒に暮らしていきたいと思ったのです。

愛する人との出会いこそが実は幸せなのです

竹取物語のラストシーン、月に帰るかぐや姫は翁たちに不老不死の薬を残していきます。「どうか長生きしてください」と。でも翁たちはその薬を飲まなかった。

「かぐや姫のいない、愛する人がいないこの世で長生きしてもしょうがない」と。苦しみも喜びも、分かち合える人がいればこそ幸せなのです。愛する人と出会うこと、そして愛する人を失っても思いを持ち続けること。それが大事だと竹取物語は教えてくれます。

木目込み人形の第一人者・金林真多呂氏による、かぐや姫人形を収蔵。

左・本堂の天井や壁面には画家の園山春二氏が描いたおとぎ絵が飾られている。　右・かぐや姫に関する書籍や文献を収蔵する「かぐや姫文庫」も。

撮影／光川十洋　取材・文／本木頼子　デザイン／黒田志麻